

シーケンスに着目した参道空間に関する研究

平成 27 年 2 月 中島 直弥

要旨

目的

本研究ではシーケンスに着目した変化性のある空間として、参道の特徴とそのシステムを明らかにすることを目的とした。近年、縮小社会や超高齢化社会を背景に、ゆとりや安らぎといった、質の高い生活空間の創出が時代のテーマとなっている。歴史や文化だけでなく観光資源、健康的なアクティビティを誘発する潜在可能性を持つ参道空間への考察は、今後の公共空間創出への一助になると考えられる。

方法

大規模寺院である善光寺と浅草寺の参道を対象に現地調査を行い、画像処理を用い開放度の概念・トレンドによる物理量分析によって参道を定量的に把握した。また、ここで得られた結果から、参道空間を分節し、SD 法を用いたアンケート調査を行い、統計手法を用いた心理量分析によって、参道の印象評価を示した。さらに、数量化理論を用いて、参道の物理量と心理量の関係性を示した。

結論

参道の豊かさとはなにかという疑問から始まった本研究は、参道内にある複数の異なるリズムを持った領域と「階段」「幾何学的な石畳」「見え隠れ」という要素が作りだす全体の関係性が重要であることを結論づけた。異なる領域に階層性が見られ、歩行者が参道を歩行する際、門周辺と本堂は評価の高い傾向がある一方、仲見世は景観操作によるスカイラインの統一によって、開放度変化が小さく、閉鎖性の高い空間となっており、参道全体の間ともいえるような領域をつくり、評価の低い傾向を示した。歩行者をクライマックスへ誘い空間の水平性を規定する「幾何学的な石畳」、空間に垂直性を与えることで水平性をより強調し空間の多層性を生み出す「階段」及び日本のデザイン技法である門や木々の障りによる「見え隠れ」などによる全体の関係性は、異なる領域のゆるやかな統一を生み出し、参道を豊かな空間として成立させていることを導いた。

指導教員 藤居 良夫 准教授